
ある異世界召還物語の、草稿

薄墨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある異世界召還物語の、草稿

【Nコード】

N1382U

【作者名】

薄墨

【あらすじ】

カウンセラーになりたいと思っていた。けれど、カウンセラーの卵にすらなれないうちに異世界へと召還されてしまった。そんな私の体験をつづった文章。もし元の世界に戻れたら、小説家の友人にネタとして提供しようと思っているのだが、こんなの使えないと捨てられるかもしれない。

あなたに語りかけるプロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

作中、残酷なシーン・描写がございます。苦手な方は閲覧しないことをおすすめます。残酷なシーン・描写の直前に警告する等の措置はいたしません。各自のご判断とご責任でもって閲覧ください。

また、作中でカウンセリングらしきものを扱いますが、筆者はもちろん、それを扱う本作の主人公もカウンセリングについての専門的知識を有してはおりません。それをご承知の上で閲覧くださいますようお願いいたします。本作で扱うカウンセリングらしきものと、実際に専門知識を有したカウンセラーが行うカウンセリングには大きな差異があることをご承知おきください。

カウンセリングをフィクションで扱うことに拒否感がある方は閲覧しないことをお勧めいたします。

上記の警告を無視し閲覧した方の苦情は受け付けません。
物語についてのご意見・ご感想はお気軽にどうぞ。

あなたに語りかけるプロローグ

突然ですが異世界に召喚されました。

……という一文から始まる物語は、昨今そう珍しくもないらしい。凡庸な主人公が平凡な日常から脱却し、非日常な環境で活躍する……周囲には美しい人々、待ち受けるのは乗り越えられる苦難、最終的には必ず幸福を掴む、というのは異世界召喚を扱った物語のお約束パターンなのだそうだ。

同じパターンばかりならば読者は飽きてしまうのではないかと疑問に思ったが、そんなことはないのだという。一風変わった世界観や、魅力的なキャラクター、ストーリーの主軸は同じであっても読者が充分に楽しめるよう、書き手は創意工夫を惜しまない。慣れ親しまれたパターンだからこそ書き手の実力が問われるジャンルでもある、なんてことも言っていたか。

まあ確かに、同じ過程を繰り返すことは人間にある種の安心感を与える。慣れや飽きだって、安心感があってこそそのものだろう。最終的には幸せになるとわかっている主人公になれば、どんな苦境にあっても安心して感情移入できるというものだ。

つまり、異世界召喚を扱う物語とは、心地のいい安心で安全な非日常を読者に提供するものなのだろう。勧められた幾つかの書籍を開かないままに、私はそう勝手に自己解釈していた。講義とレポートとバイトに追われて読まずに放置したことを、後悔するべきか否か。

今の私を取り巻く現状を知ったら、あなたは何と言うだろうか。いいネタだと喜ぶか、どうして自分も行けなかったのかと悔しがるか。どちらも有りうるが、おそらく、こう言うのではないだろうか。

——こんなの全然、話にならない！

現状までのモノログ

異世界召喚を取り扱う物語において、冒頭部をどう描くのかは非常に神経を使うところらしい。

いわゆる異世界トリップものと呼ばれる物語の冒頭部では、主人公の人間性はもとより、主人公のそれまで置かれていたバックグラウンド、トリップした理由、トリップした異世界の説明、その他新たに登場する人物の説明等、どうしても様々な情報が錯綜することになる。いちいち詳細に説明しては冗長になり読者を飽きさせてしまうし、かといってあまりにアバウトすぎる描写ではリアリティーに欠ける作品になってしまう。そこをどう面白く描いていくのが作者の腕の見せ所でもあるのだそう。

とはいえ、私は別に物語を創作する人間ではないので、そうした技巧は残念ながら持ち合わせてはいない。せめて冗長にならないよう心がけて説明していきたいと思うのだが、アバウトすぎたり面白みに欠けたりする点についてはご容赦いただきたい。

まずは私のことを説明するべきだろう。

私の名前は高崎夕菜という。性別は女、職業は大学生だ。容姿に関しては、平均的な日本人の枠を大きく脱してはいないと思う。周囲からよく受ける身体的評価としては、童顔、ちびっ子、胸小さい、といったところだろうか。

私の性格については……何とも説明しづらい。推薦入試や就職面接でやりそうな自己PRのようになってしまいそうなのだ。パーソナリティなど主観と客観では大きく違うものであろうし、私をどんな人間と捉えるかは個々人の今後のご判断に委ねさせていただこう。次に説明すべきは、私が召喚された異世界について、なのだろうが。

申し訳ない話だが、実のところこの世界についての知識はほとんど皆無なのだ。私が得ている情報のほとんどが、私を召喚した国に関するものに限られている。正直それすら未だ把握しているとは言い難いのだが、何故見知らぬ世界に召喚されて間もない身、ご理解いただきたい。

ひとまずは、この国についての説明をさせてもらおう。この国の名はユグドラス。立憲君主制をとる王国である。北方の雪深い土地に建国した歴史の浅い国で、もとは他国で追放や流刑になった罪人が集って出来た国らしい。そのため多種多様の民族や文化が混在しているのだが、民族間の軋轢はほとんどないのだそう。罪人として国を追われた者同士が、厳しい自然条件の中で生き残るため、互いに身を寄せ合って国を作り上げた歴史が記憶に新しいためだろう。

そんな歴史的背景を抱えているこの国は、当然のように排他的だ。資源の限定された雪国であるため最低限の国交は開いているものの、他国の者が入国して気軽に観光を楽しめるような国風ではない。宿や食堂を他国の者が利用できないなどということはないが、始終白い目で見られ続けることを覚悟しなくてはならないらしい。もちろん罪人や流民として入国する者に関してはその限りではないが。

また、諸外国の方もこの国に関しては微妙な認識を抱いているらしい。建国以来、驚くほど短期間で急成長を遂げたこの国は、罪人の国と侮るには大きく、脅威とみなし他国と手を結んで滅ぼす手間をかけるには利益の少ない、中途半端な位置づけにあるらしい。様子見を兼ねて、とりあえずはこの国が求める最低限の交易に応じている、というのがほとんどの国の現状なのだそう。

さて、この流れでそのまま私が召喚された理由の説明に入ってしまう。

私を召喚したのは、この国の宮廷魔術師なる者たちである。さらに正確に言えば、宮廷魔術師の一人が発案した計画に他の宮廷魔術師が力を貸した、となるらしい。つまり、私を召喚したいと願いそれを実行したのはたった一人の人間であったと言えるわけである。

そのたった一人が、どういう目的で私を召喚したかというのと、前述した諸外国との関係を打開するためだったのだそう。

この国はいま、岐路に立っている。今後さらなる国の発展を望めば、他国に脅威と認められる可能性が高まる。そうでなくても、複数の国が手を結んで攻め込んでもなお得られる利益が多いと見込まれれば、侵略されてしまうかもしれない。何しろもとは罪人の国なのだ。侵略する大義名分などいくらでも作れる。

……わかりにくい説明だったかもしれないので、多少乱暴になるがもう少し噛み砕いて言い換えよう。この国の国民のご祖先は各国を追放された罪人である。諸外国はどこも罪人を追放した身に覚えなど、それはもう腐るほどあって、そんなご先祖さまを持つ国が大きくなりすぎてしまったら、もしかして復讐されるのでは、と思ってしまうのだ。

現状は、わざわざ潰すには大きくなりすぎちゃってこっちも無傷では済まないし、かといって他国と協力して侵略したところで、皆で分け前を分配したら取り分が少なすぎるからやる気にならない、あっちもこちらに復讐するほど余裕があるわけではないからとりあえず放置しとくか、という微妙な均衡の上にあって静止している。

このままの均衡状態を保つことに腐心するか、リスクを承知でさらなる発展を望むか、二つの選択肢の前で立ち止まっている――というのが現在のこの国の状況らしい。

少しはわかりやすい説明ができただろうか？

話を戻そう。私を召喚した宮廷魔術師は、発展していくべき、という考えの持ち主だったようだ。発展したことによって生じるリスクを軽減するべく、有用な能力・知識を持った人間を探していたのである。他国の人間の力を借りようなどとはさらさら思わない、けれど異世界の人間なら別にいいだろう……そんな感じで召喚されたのが、私である。

ここではつきりと言っておくが、そんな能力や知識を、私は持っていない。宮廷魔術師の他力本願な計画は私を召喚した時点で失敗

に終わったわけである。しかし、だ。

……この計画が失敗であったと認識されたのは、私が召喚されて三日が経過した頃だった。「あなたはこの国を救うことができますか?」「いいえ、できません」聞いてくれれば十秒で終わったはずの確認に、件の宮廷魔術師は三日の時間を使ったのだ。

その間、私が体験したことを掻い摘んでお話しよう。

まず、目が覚めた瞬間。数十人の兵士が剣の切っ先を突き付けて私を取り囲んでいた。僅かに身じろぎをしただけで、突き付けられた剣先は一斉に首筋へと位置を変えた。鋭利な刃物の冷たい感触を前後左右の無数に感じ、背筋が凍ったのは言うまでもない。万が一道理の通じない危険な存在を召喚してしまった場合を考えての対処だったらしいが、その状況から解放されるだけでも、一時間を要した。一時間後、恐怖に耐えかねた私が気絶するまでひたすら続けられたのだ。

それから三時間を置いて、私は頭から冷水をかけられるという手荒い起こされ方をした。その三時間というのも、私を休ませるための時間ではなかったらしい。どうやら危険はなさそうな異世界人をどうするか、宮廷魔術師の間での話し合いに要した時間だったそうだ。

とにかく、起こされた私が次に体験したのは、模擬戦闘、だった。具体的にどんなことをしたかと言えば、剣を一本持たされて、円陣を組んだ兵士たちの中心に立たされた。兵士たちは手にそれぞれ木刀を持ち、一人一人順番に、だが不規則な方向からそれを私に振り下ろしてきた。私の戦闘能力が持つ可能性を危機的状況に追いやって試していたらしい。どれくらいの戦闘力を持っているか、あるいは現在持っているか、あったとしても、今後どれくらい伸びる可能性があるのか。

……結果だけを言わせてもらおう。大怪我をしただけだった。

次の目覚めは、誰に起こされるわけでもなく自然な目覚めだった。具体的にどこがどうなったとは思いついたくもないので言わないが、

色々と負傷していた個所は治癒魔術によって治されていた。それでも丸二日を眠っていたらしい。

この時の私の心理状況を、一言だけ述べておこう。

目覚めたことに、絶望していた。

その後私が体験したのは、水攻めと言って間違いない。小さな泉の中に入れられ、数人の兵士に無理やり頭を押さえつけられて水面へ押し込められた。呼吸がままならず何度も気絶しては、頬を叩かれ起こされた。いつそ楽にして欲しい、とさえ願った。

その泉は人間が持つ魔術を目覚めさせると言われている泉で、泉の中に身を横たえ精神統一することで眠っている魔力を目覚めさせることができるらしい。

……やはり、結果だけを伝えることにする。私が魔力をまったく有していないとわかったのは、水攻めが始まって半日近くがたった頃だった。

この後、私は宮廷魔術師のもとから解放された。とある人に保護され、そこでようやく自分が異世界に召喚されたこと、ここがユグドラスという名の国でどんな国であるのかを教えてもらうことができた。もつとも、まともな対話ができる状態まで心身ともに回復したのは、保護されてから三カ月後のことだったのだが。

その人は、私を元の世界へ戻すと約束してくれた。準備を整えることに時間と手間がかかるそうだが、不可能ではないと、そう言ってくれた。その言葉に私は心からの安堵を覚えたのだが、けれど、帰れなかった。

帰れなかったのだ。帰らなかった、と言いたくはない。帰れなかった。

元の世界へ帰すと言ったその人の言葉が、嘘だったわけではない。元の世界に送り返す魔術が失敗したわけでもない。その人は本気で私を帰そうとしていたし、実際、そのための魔術の準備もほとんどが終わっていた。けれど、私は帰れなかった。魔術を実行するその直前に、知りたくもないことを知ってしまった。そうして帰れなく

なつた。

そろそろ紙面も尽きてきた。帰れなくなった理由が何なのか、その後私がどうしたのかは、次の機会に話したいと思う。

最後に、ここまでの文章を軽く読み返してみたのだが、冗長にならないようにと言ったはずがまったく実現できていないと感じた。

……すみません、物凄く、冗長になってしまいました。

やはり私に、物語を書く才能はないようだ。

せめてあなたの貸してくれた書籍を、読んでおくべきだったのかもしれないと今さらながら後悔している。

保護者についてのイントロダクション

異世界召喚を取り扱う物語において、金髪・碧眼・美形と三拍子揃った登場人物の存在は重要な要素なのだという。

文章でしか情報を伝えられない小説においては、いかにして読みにイメージを伝えるのかは書き手の腕を試されるところだ。その点において金髪・碧眼・美形の登場人物は、非常に古典的で使い古された――だからこそイメージを伝えやすい存在である、らしい。

一般的に、金髪・碧眼・美形の登場人物というのは、高貴、聡明、有能といったポジティブなイメージを想起しやすいのだそうだ。これは、金髪・碧眼・美形のキャラクターがそういった要素を持つ登場人物として昔から多用されてきたためなのだろうか。そういった物語をあまり読んでこなかった私としてはいまちピンとこない話なのだが、とりあえず私にとってもっとも身近な金髪・碧眼・美形の人物が高貴で聡明で有能であることは間違いない。

その人物の名を、フレート・ギルナ・アーデインスという。

この世界における、私の身元引受人である。

「もう、見捨てていいですか？」

細く優雅な指先で机をコツコツと弾きながら、その人は言った。

「すみません。見捨てないでください」

机を挟んで向こう側に座るその人の方に体を向けながら、けれど極力視線は合わさないようにして、私は答える。

「面倒くさいんです、あなた」

「……それはもう、重々承知しているのですが」

「承知していてなお、ああいう選択をしたと？ 随分と性質が悪いですね」

「すみません。何度でも言います、本当にすみませんでした」

私の何度目かの謝罪に大仰な溜息を吐いたその人は、額にかかる金色の髪を掻き上げて、文字通り頭を抱えた。

「あなたは、被害者でした」

「はい」

「私は潔癖な思考の持ち主ではありません。もしもあなたに利用価値があったのなら、あなたの意思がどうあろうともそれを利用したことでしょし、あなたに何らかの害があるのなら、排除することに躊躇いを覚えはしなかったでしょう。けれどあなたは、無価値で無害でそして無関係な、異世界の人間だった。だからこそ、あなたは謝罪すべき被害者足り得たのです。それはわかりますか？」

「はい」

「被害者であるところのあなたに、加害者である我が国の代表として私が成すと約束したのは次の通りでした。精神的に追い詰められた状況にあったあなたに休息を与えること。その間の衣食住の提供。あなたの置かれた状況に対する説明と謝罪。そして、あなたを元の世界へと送り返すこと。私はこれを、何一つ違えるつもりはなかったのです」

「……はい」

「本来であれば、あなたはとくに元の世界に帰還し、すべては悪い夢だったのかもしれないと思い始めていたことでしょう。ついでに言えば、私はこんなところで頭を抱えずに、政務に没頭する充実した時間を過ごしていたはずです」

「………」

「黙っていないで何か言いなさい。謝罪以外の何かを」

無理を言わないでください。私はそう答えた。……心の中で。

フレート・ギルナ・アーデインス。この国、ユグドラスの宰相にして現在は私の身元引受人……というかもはや保護者のような役割を担ってくれている人である。この世界に召喚されてはや三ヶ月、私の衣食住は全面的にこの人に依存する形となってしまうている。

「アーデインスさんには本当に感謝しています。おっしゃる通り、

あなたは私に約束してくれたすべてを叶えようとしてくれました。悪いのは私です。それは、わかっているんです。私は、せっかくのご厚意を無下にしてしまいました」

そう、悪いのは、私だ。

私が元の世界へと送り返されるはずだったあの日。召喚された時と同じ薄暗い地下の魔術場（魔術を行使するに適した細工のされた部屋らしい）で、私は確かに、元の世界へと戻れる喜びを噛みしめていた。魔術が失敗して帰れなかったらどうしよう、なんて不安があったくらいだ。まさかその魔術を行使する前に自分で止めることになるうとは、夢にも思っていなかった。

「これは、あなたが気に留めるべきことではないですよ」

不意に、アーデインスさんがそう言った。あの日と同じ台詞。

「わかっています。わかっているんです。わかっていなければ、謝罪なんて口にしません」

「そうでしょうね。わかっていなければ、あなたは私を責めたでしょうから」

あの日。魔術を行使する直前。数人の男女が兵士に連れられ部屋に入ってきた。その人たちがどんな立場の人間なのかなどわからなかったが、なんとなくテレビで見る警察官に護送される犯人を思い起こさせる雰囲気だった。

彼らの私を見る、あの目。恐怖と、憎悪と、哀切と、懇願とが入り混じった人間の瞳。それを目にした瞬間、事態を理解できないなりにただならぬものを感じ、私は硬直した。浮かれた気分に冷水を浴びせられたような、疑惑と羞恥心が全身を支配する。

私は尋ねた。彼らは、何者なのかと。アーデインスさんは、答えた。彼らは私を送り返すための魔術に必要な、贄なのだと。

贄、という単語の意味が一瞬ピンとこなかった。

続けて、アーデインスさんはこう言った。これは、あなたが気に留めるべき問題ではないのだと。彼らは重犯罪者で、いずれにしろそう遠くない未来に極刑に処せられる人間たちなのだからと。

その言葉に、贄という単語の意味を理解した。そうか、生贄だ。彼らは死刑にされても仕方ない罪を犯したから、私を元の世界に送り返すためにその命を利用されるのか。

だとすると、召喚のときは？ 送り返すときに贄が必要なのだ、召喚のときに贄を使わなかったはずがない。ならば、私は。他人の命を犠牲にして望まない召喚をされた挙句、あんなめにあい、さらには再び他人の命を犠牲にして送り返されようとしているのか。

頭の中に霧がかかったように、思考がぼやけた。どうすればいいのだろうと、そればかりが脳裏を駆け巡る。怒るべきなのか。嘆くべきなのか。それとも何もかも素知らぬふりをして、元の世界へ？ ああ、それが一番利口な選択なのだろう。他人の命なんて、知ったことじゃない。こんな世界にもう一刻だっていたくはないのだ。帰りたい。帰れるのだ。帰してくれると、気に留める必要はないと、アーデインスさんは言ってくれたじゃないか。

日本にだって死刑制度はある。彼らが何をしたのかは知らないが、それは他国の、ましてや異世界の人間がどうこう言う問題ではない。アーデインスさんの言う通り、私がここで帰らないという選択をしたところで、彼らの命が助かることはないだろう。だけど。

自分さえよければ、他人のことなんてどうだっていい。それを否定するつもりはない。恥じる気持ちも、ない。……だけど、だからこそ。彼らのあんな目を見てしまった後で、元の世界に戻れたとしても、私はそれを心から喜べるのだろうか。

——ああ、駄目だ。帰れない。

そう考えた瞬間、私はアーデインスさんに魔術の中止を申し出ていた。その後は、諭され、怒られ、呆れられ……少し冷静になりなさいと放置され、そうして一週間が過ぎ、今日にいたる、というわけだ。

それでもやはり、私の考えは変わらない。この国の死刑制度にも罪人の活用法にも文句を言うつもりはない。かといってそれに便乗して元の世界に帰るつもりもないし、彼らを救うつもりもない。つ

くづく中途半端な考えだとは思う。だけど私は結局、自分が一番かわい。私の知らない所で誰かが死ぬのは構わないけれど、私の目の前で私のために人が死ぬのには誰であろうと耐えられそうにない。これも偽善というのだろうか。偽りであろうと善を主張するつもりはまったくないのだが。

「物分かりがいいのだから、悪いのだから……面倒くさい。本当に、面倒くさい人を拾ってしまったものです」

「すみません」

「謝罪はもう結構です。帰らないというのなら、今後はどうするつもりですか」

「この国で生きていくしかないと思っています。何か私でも出来る仕事を探して、できるだけ早く自立しようと。……このうえあつかましいお願いで申し訳ないんですが、戸籍の作成と、職業斡旋所のような場所があれば教えていただきたいのですが」

冷静になれと言われたこの一週間、帰れないという結論は変わらなかったにしろ、何も考えていなかったわけではない。帰れないのであれば何をすべきか。最優先事項は衣食住の確保だ。いつまでもアーデインスさんに依存してはいられない。

大概のことは、何をすべきか、そう考えることで決められる。何を感じるか、を自分に問うことは、後回しでいい。

「右も左もわからないこの国で、ただの小娘が、たった一人で生きていけると？」

嘲るような言い方だった。切れ長の碧い双眸が、見下すような光を帯びている。

「断言はできませんが、それはどこに生きていても同じことだと思っています。私が勝手に言い出したことです。無価値で無害で無関係な……被害者でもなくなったただの小娘がその後どうなるうが、アーデインスさんには何の責任もありません」

「見捨てないでほしいと言いながら、同じ口で見捨ててくれて構わないと言うのですね」

「戸籍と職業を探せる場所を与えてくれるんです、それを見捨てるとは言わないでしょう」

「あなたがそれでいいと言うのなら構いませんよ。近日中にあなたの戸籍を作成します。ついでです、職場の斡旋も私がしましょう」事務的な口調で言って、アーディンスさんは興味をなくしたように私から視線を外した。その瞳には、変わらず見下す意思が色濃く残っている。私がこの世界で生きていけるはずがないと、そう思っている心中が透けて見える態度だった。

思えば最初からこの人は一貫してこんな感じだった。私に同情も期待もしていないのがよくわかる対応。いや、対応というよりむしろ対処に近いか。そこには一切の余計な感情はなく、だからこそ、この人の言葉は信じられた。

「ありがとうございます」

「それで、何か希望する仕事はありますか？」

「いいえ、特には。アーディンスさんにお任せします」

「そうですか。元の世界では、たしか学生だったのですよね。何を学んでいたのですか？」

「心理学……と言ってわかりますか？」

アーディンスさんは首を振った。外されていた瞳が、再び私を捕えてまっすぐに見据えてくる。どうやら興味を持っているらしいと察して、私はわかりやすい説明を考える。

「文字通り、人の心理を探求する学問です。認知や記憶、行動、感情、人格、発達、あらゆる側面から人間の内面をはかり、それを論理づけようとする学問……だと、私は考えています。形がないゆえに、定義が難しいのですが。私はそこで、臨床心理学というものを専攻していました。あらゆる要因から心に不調を来した人を、理解し援助する理論と技術を学ぶ分野です。といっても、まだほんの基礎的内容を学んだばかりのところで、実践には遠く及びませんが」

「なんとも不明瞭な学問ですね。想像が付きません」
その指摘はもつともだった。だからこそ心理学は、つい最近（学

問の歴史的な観念で）まで学問の一体系として確立されることはなかった。実のところ学んでいる身の私としても、なんだか漠然としていて掴みづらいつと感じることは多い。

「残念ながら、その……心理学？　というものを活かせる職業が思いつかないのですが、いずれにしろ、何がしかの職はきちんと紹介しましょう」

「よろしくお願いします」

再び興味をなくしたように視線を外したその人に、私はそれでも頭を下げた。

そろそろ紙面も尽きた。アーデインスさんがどんな職を紹介してくれるのかは、次の機会に話すことにしよう。

それにしても、読み返してみると自分の表現力のなさに軽い絶望感を覚える。冒頭で述べたとおり、金髪・碧眼・美形の人物であるアーデインスさんについて書こうと筆を執ったはずなのだが……。

自分に物語を書く才能がないのは前回でわかったが、もう少しこう、向上の兆しというものは見えないものだろうか。

せめてあなたの数十分の一でも、物語る能力が身につけばと思う。

人生初のクライエント 1

急展開、というものは、どんな物語にも必ずあるもの……なのだろうか。

思えばここが、その後の私の生活が一変する最初の一步であった。一連の流れをお話するには、少し長くなってしまおうのだが——どこから話せばいいのだろう。迷いながら、筆を執る。

その日の朝は、いたって平常通りだった。

アーデインスさんから与えられている私室で目を覚ました私は、寝ぼけ眼を擦りながら、誰に急かされるでもなくゆっくりと身支度を整えた。

王城の外れ、王城に勤める者たちの居室となっている区画の中にあるこの部屋は、宰相であるアーデインスさんに割り振られた持ち部屋の一つで、一応客室として内装を整えてはいたものの、これまでまったく使用することなく空き部屋として遊ばせていた部屋なのだそうだ。

基本的に、私はこの部屋の中で一日のほとんどを過ごす。と言っても、特別に外出を禁じられているわけではない。けれど、なんといっても右も左もわからない環境、何が正しく間違っているのかの価値基準もわからない場所だ。万が一にも何か問題が起こった場合、身元引受人となっているアーデインスさんに迷惑がかかることになることはわかりきっているため、自分から部屋を出ることはあまりなかった。

例外として一日に一度、昼食の時間だけはアーデインスさんの私室を訪ねるのが恒例だった。朝食や夕食を部屋に運んで来てくれるアーデインスさん付きの侍女さんたちが、昼食の時間だけは準備が

整うと呼びに来て、アーデインスさんの部屋へ連れて行ってくれる。そうしてアーデインスさんと一緒に食事をするのだ。

この時間はもともと、悪夢のような召喚直後の出来事にすっかり心を閉ざしてしまっていた私の調子を探るために設けられたものだった。アーデインスさんにとっては、昼食を摂りながら私の状態を把握 できることは大変効率が良かったらしい。

ついでに侍女さんたちにとっても、放っておけばいつまでも部屋に引きこもっている私の部屋を心おきなく掃除することのできる唯一の機会として、この時間は有効に活用されているようだ。昼食を終えて部屋に戻ると、いつも部屋が清潔になっている。

私にとっては一日で唯一、自室から外（といっても屋内であるが）に出る時間なのだが、特別な感慨はなく、アーデインスさんから投げかけられる質問……というか、毎度同じの確認事項（体調は悪くないか、生活に不自由はないか等）に最低限の応答を重ね、後は無言で昼食をいただく毎日であった。だが、この日はそれが違った。

いつものように侍女さんに声をかけられてアーデインスさんの私室を訪ねると、そこにはいつも通りアーデインスさんと、そして見知らぬ男性が一人、席についていた。

年の頃は、アーデインスさんと同じくらい……二十代半ばから後半にかけてといったところだろう。アーデインスさんを理知的で涼しげと評するなら、この男性は、しなやかで野性的、とても言ううか。暗さを孕んだ赤銅色の髪と、少しつり上がり気味の黒い瞳、痩身でありながらもけして脆弱さを感じさせない雰囲気は、相対する者に研ぎ澄ました金属のような鋭い印象を与えるものだった。

この人は、いったい何者なのか。いつも通りに呼ばれはしたものの、もしかするとそれは何かの手違いで、アーデインスさんの予定では、今日の昼食はこの男性と共にするつもりであったのかもしれない。同席してはいけなかったのではないだろうか。

さてどうしたものかと立ちつくしていると、それに気づいたアー

デインスさんがこちらを見て、座りなさい、と視線を椅子へ持って行った。どうやら、私はちゃんと呼ばれていたらしい。素直に従って席に着くと、その男性は、ふっ、と微かな笑いを零す。

「おまえたちは、そうやっていつも目で会話しあっているのか？」

「無駄な労力が省けますからね」

からかうような男性の言葉に対して、アーデインスさんは平然と答えた。

「まるで熟年夫婦を見ているようだな。随分仲がいいようだが」

「私をからかう労力がまだ残っておいででしたか。ならば、午後からの休憩など不要でしたね。その元氣なら昨日の倍は仕事が捗ることでしょう。いまからでも遅くない、変更いたしましょうか」

「その必要はない。まったく、相も変わらずつまらない男だな。他愛ない冗談も解さないのか」

「無駄な労力を割くのは嫌いなんです」

「無駄というか。話術を楽しむ余裕もない宰相というのも困りものだ。……もう少しからかい甲斐があれば、申し分のない宰相だろうに」

「宰相の職分に、そのような条件などありませんが。もう一度、初歩から学び直しますか。何でしたら、私もお付き合いますよ」

「……もういい」

二人の軽口の応酬が止んだところで、侍女さんたちが料理を運んできてくれる。……心なしか、いつもよりメニューが豪華だった。この男性がいるためだろうか。

「さて、」

ひとしきり料理が運び終えられたところで、男性はパチンと指を弾いた。すると、いつもは食事が終わるまで側で控えてお茶やスープレの給仕をしてくれる侍女さんたちが一斉に退出していく。最後の侍女さんが退室し扉が閉められた後、少し間をおいて、男性は私に視線を向けると、まるで獲物を前に舌なめずりする肉食獣のように、愉しげに薄く微笑んだ。

「ユーナ・タカサキ。年齢、十九歳。職業、学生……ああ、大学生というのだったか？ 専門は、心理学といったな。出身は、チキウウのニホンという島国で、家族はおらず、同居人が一人。三か月前、我が国の宮廷魔術師によって召喚され、拷問といって過言でない処遇を受けた。その後アーディンスの手によって保護され、国家の被害者として待遇を受ける。先日、元の世界に返すための魔術が執り行われる予定だったが、その直前に突如帰らないと言い出し、儀式は中断。現在はこの国で生活することを希望している……と」

不意に朗々と語られた自分の経歴に、私は少し驚きながらもアーディンスさんを見た。これらはすべて、アーディンスさんに話した内容である。

アーディンスさんは注視する私を少しも気にすることなく黙ってスープを口に運んでいたが、唐突にさっと視線を上げると、あつちに注目していなさい、と言うように男性へ視線をやって、再びスープを口に運ぶ作業に戻った。

「おまえら……俺を除け者にして二人だけがわかる会話をするな」嫌そうに眉をひそめる男性に、私は「すみません」と謝罪したが、アーディンスさんの方は素知らぬ顔だ。

「まあ、いい。それで、以上の内容に間違いはないか？」

「はい、ありません」

「そうか。では、決まりだな」

「はい？」

この瞬間、何が決まったのかまったくわからない私は、首を傾げて消極的に疑問を露わにした。

「よし、まずは食事にしよう」

消極的な態度がよろしくなかったのか、気づいていないわけではないだろうに、私の疑問をあっさりと流して、男性は黙々と食事の手を付け始めた。

どうしたものか、と困惑しているところに、ふとアーディンスさんからの視線を感じた。そちらを向くと、彼は……あえて言うなら

憐れみと嘲笑が混在したような何とも形容しがたい瞳でこちらを見ていた。

いったい何事ですか、と視線で問うてみるが、アーデインスさんはそれきり視線を逸らしてしまい、私の疑問に答えてくれる者は誰もいなくなった。

いつもよりも豪華な食事は、消化に良ろしくなさそうな居心地の悪さの中で終わった。

男性は「では、行くか」と言うと、おもむろに席を立った。

それを啞然として見ていた私は、ここでもアーデインスさんの、あなたも行くんですよ、という視線を受けて、ようやく立ち上がった次第だ。

「おまえら……いや、もういい。とにかく行くぞ」

呆れたように言って、男性はそのままスタスタと足早に歩きだした。結構なスピードで歩いていくものだから、背も低ければ足も短い私は、小走りになってその後を追うしかない。

赤髪の背中には慣れた様子で迷いなく廊下を突き進み、途中幾つかの通路を曲がって、とある部屋の扉を開けてそこに入る。

見失わないよう男性を追うのに手一杯だった私は道順をまったく覚えられなかったため、帰りはどうしたらいいだろうかと思いいながらも、とりあえずは遅れて部屋に入る。

この王城にこんな部屋があったのかと思うほどに、こぢんまりとした部屋だった。室内はおそらく六畳ほどの広さで、質素な造りをしている。私の身長よりも高い長方形の窓。開放されたそこから、真昼の温かな陽の光と風が室内へと差し込んでいる。ちょうど陽射しが当たる位置には、小さなテーブルを挟んで二脚の椅子が置かれていた。

男性は、開け放たれていた窓を閉じると、椅子の一方に腰を下ろして足を組んだ。ここは、私も席に着くべきなのだろう。そう思っ

て反対側の椅子に着く。

「わけがわからないだろう？」

その通りだ。私は黙って頷く。私の置かれている状況を、どこか面白がっているようなその言い方が、少し不愉快だった。

「私をここに連れてきたのは、こういった理由があつてなのでしょうか。教えていただきたいのですが……」

「知りたいか？」

「教えてください」

「駄目だ」

きっぱりとそう言った後、男性は「さて」と続けた。

「先日、アーデインスから心理学のことを聞いた」

「心理学、を」

その瞬間、はっきりと嫌な予感がした。

「心理学というのは、なかなか面白い学問だそうじゃないか。確かおまえは、心理学とは人間の内面をはかりそれを論理づける、と言ったのだったな。それがいったいどのようなものか……俺は興味がある」

嫌な予感がますます強まる。

確かに、心理学とは何かという説明の中で、それと同じことをアーデインスさんに言った気がする。だがしかし、これは。

「わざわざ聞く必要などないだろう。いま、ここで。おまえの言う心理学とやらを用いて俺の内面をはかり、それを論理づけてみるがいい。できるだろう？」

黒い瞳が、挑戦的な光を宿して爛々と輝く。

「……………」

ああ、最悪だ。

嫌な予想が的中して、私は猛烈に頭を抱えた。
どうしよう。眩暈がする。

人生初のクライエント 2

文字通り両手で頭を抱えながら、私は一度、溜息を吐いた。ゆっくりと細く息を吐き出しながら、全身の力を抜くよう意識して強張った筋肉を弛緩させる。

「仮に、私があなたの内面を言い当ててみたとして、あなたはどうしますか」

「どうもしないさ。とりあえずは、心理学というものに興味があるだけだ」

「もし、私が的外れなことを言ったら？」

「おまえが偽りを言っていたということになるな」

黒い瞳が、鋭さを増した。

目の前にいるこの人に、いい加減なことを言う嘘つきだと思われること、それ自体は構わない。出会う人の誰からも信頼を得ようなど無理な話だし、一切の素性を明かさないまま自分を試そうとしている人間に、不信感を抱きこそすれ、よく思われたいなどとは思わない。

けれど、この男性の私に対する認識が、そのままこの国においての私に対する認識になるというなら話は別だ。アーデインスさんと会話していた口ぶりからいって、この男性の身分は宰相であるアーデインスさんに近い位置にある可能性が高い。そんな人間が、忙しいらしい業務の合間を縫ってわざわざ私を試そうとするのは何故なのか。個人的な興味に過ぎないふうを装ってはいるが、実際のところはわかったものではない。この国で生きていくしかない以上、余計なマイナス要素は少しだって抱え込みたくない。

「……私の言うことが真実であるのか偽りであるのか、あなたの一存次第で判じるということですか」

「心許ないか。俺が白を黒と言い張るとでも？」

「そうでなくても、白を黒と思いこんでいる可能性もあるのが人間というものではないでしょうか」

「どういう意味だ」

問われて、私は唾を呑んだ。

さあ、糸口は掴んだ。後はどういうふうに会話を運ぶかだ。せつかく与えられた主導権を手放してはいけない。

「自分で認識している自分など、所詮は本当の自分の一部分に過ぎないということです」

「ならば、おまえにはわかるのか。本当の俺を」

「いいえ。私の知り得るあなたもまた、本当のあなたのほんの一面に過ぎません。ただ、そこにはあなた自身も知らないあなたの一面が含まれているはずです」

「たとえば？」

「いまそれを言っても、あなたは到底信じられないでしょう。なぜなら、あなたは私を試している。試すということは、知らないということですよ。知っていれば試す必要などないのですから。たいして知りもしない人間から、これまで自覚しなかった自分を言い当てられたとして、それを素直に信じられるでしょうか？ 私は信じられません。そして、信じられないものを真実だとも思えません」

「……筋は通っているな。だが、それでは心理学が人間の内面を論理づけるものだ証明する手段はないということではないか？」

「そもそも証明する必要などないのです。確かに、心理学は人間の内面をはかりそれを論理づけようとする学問だと、私は言いました。けれどそれは、魔法のように便利なものでも、奇跡のように常識はずれなものでもありません。あらゆる方法を用いて、幾つもの側面から人間をはかり、仮説を立て、時にはそれを覆し、理解しようと努めた結果、ようやく結論に至る。そうしてその結論さえもが、人間が変わっていく存在である以上、暫定的なものに過ぎないと考え。それが、心理学というものだとは私は考えています」

一息で言い終えて、目の前の男性を窺う。

男性は、面倒そうに頭を搔くと呆れた目で私を睨んだ。

「つまり、初対面の人間の内面を論理づけるなど不可能だ、と言いたいわけだな。ならば最初からそう言えばよかっただろう。くどくどと回りくどく説明する必要があったか？」

「お言葉ですが、最初に、できない、と言ってしまったら、その時点で私を大言壮語する嘘つきだと思われたのでは？ その後いくら心理学とはそういったものではないのです、と言葉を重ねたところで、聞き苦しい言い訳にしかとってはもらえなかったと思うのですが」

「まあ、そうだな」

あっさりと同意して、男性はふっと笑みを零した。意外なほど無邪気な笑顔だった。

「心理学とやらはさっぱりわからないままだが、少なくとも、ユーナ・タカサキという人間が、愚かではあるが救いようなない馬鹿ではないとわかったのは収穫だ。とはいえ、アーディンスが気にかかる理由はまったく理解できないが」

「アーディンスさんが、気にかける？ ……私を、ですか」

思いがけない言葉に問うと、男性は再び呆れた顔をして私を見た。「おまえ、あんな目と目で会話、みたいな芸当をしておいて何を言う。おまえがどうかは知らないが、アーディンスがあんな真似をする人間は、これまで一人だっていなかったんだ。第一、アーディンスの役割は被害者であるところのおまえを保護することだった。おまえが元の世界へ帰らないと言い出した時点で、被害者ではなくなったおまえを保護する義務もない。本来のあいつであれば、とくに放り出していたはずだ」

「それに関しては……見捨てていいですか、と聞かれました」

「その時点で、すでにあいづらしくないな。アーディンスは、見捨てる相手にいちいちお伺いを立てるような人間じゃない。見捨てていいかと尋ねたということは、見捨てることに迷いがあったということだろう。いったい、あいつに何をしたんだ？」

「何もしていませんよ。気にかけていただいている、ということすら知りませんでした。もちろん親切にしていたということには感謝していましたが、それがアーディンスさんにとって例外的なことだとは思ってもみませんでした」

「……別段、これといって魅力的な存在だとは思えないんだが」

まじまじと私を見据えながら、男性は言う。本人を前にしてこうもはっきりと言えるとは、いい性格をしている。もっとも、特筆すべき魅力のある人間ではないことは自覚しているので、反論するつもりはないが。

「なあ、アーディンスはロリコンか？」

「それこそ知りませんよ」

自分が童顔で幼児体型であることも自覚しているので、反論はしない。しないが、人の体を上から下まで眺めながらそういうことを言うのはやめてもらいたいものだ。あまり気分のいいことではない。

「……おまえも大概、からかい甲斐のないやつだな」

「からかいたいと思っているのが透けて見える人に、素直にからかわれてあげるほど親切ではないので」

「まあ、いい。冗談はここまでにして、真面目な話をするぞ」

冗談だったのか、と内心思いながらも頷くと、男性の表情が一変した。

先ほど浮かべた無邪気な笑顔は幻だったのかと思うほどに、感情の見えない無表情。黒い双眸に宿る光が、真冬の夜を思わせる凍てついた温度になった。

「自己紹介が遅れたが、俺の名は、ローラント・フィール・ウィルナ・ユグドラス。この国の、国王だ」

やはりそうか、と思う気持ちと、男性の変わりように驚愕する気持ちがあった。

先ほどまでの野性的でどこか無邪気な顔がプライベートなものなら、いまの冷たく無慈悲で禁欲的な印象を受ける顔が、国王としての公式のものということだろうか。

「本来であれば、一国の主としておまえの身に起こった事態について謝罪すべきところであったのだろうが……いまはもう、その必要はないな？」

問われるまでもないことだった。その件に関しては、アーディンスともすでに散々話し合ったことだ。それについては当然、この男性の耳にも入っていることだろう。それでもなおこの場で確認するということは、改めて国王である自分の前で宣言しろということなのか。

「はい。過分なほどのご厚意をいただきながら、それを断ったのは私の身勝手であること、自覚しております」

「ならば、この国に住みたいというおまえの希望を叶えることをもって、この件に関しては終わりとする。おまえを一国民として認める代わり、今後一切、特別待遇はないものと思え」

なるほど、先ほどの確認は、こういうふうに話を帰結させるためだったのかと納得がいった。

「ありがとうございます」

椅子から立ち上がり恭しく頭を下げると、国王は一つ頷いて、それから再び着席するよう椅子を指で示した。まだ、話は続くということだろう。素直に従って椅子に腰を下ろす。

「この国で暮らすために必要なものについてだが、戸籍に関しては近日中に整備させよう。戸籍が作成されたその日から、おまえはこの国の国民だ。衣食住に関わる諸経費はすべて自分で負担するように。ただし、職が決まり収入を得るまでの間は、最低限、国で支給しないこととする。暫定的にはこれまで通りアーディンスの保護下に置く。必要経費はアーディンスを通して支払おう。また、その間に何か問題を起こした場合は保護者であるアーディンスの責となることを心得ろ」

「ありがたいお話ですが……アーディンスさんはそれでいいんでしょうか？」

いまの話でいくなら、私は今後もアーデインスさんに手間と負担をかけることになるということだ。臣下であるアーデインスさんには、命じられれば否やはないのかもしれないし、それに関して口出しする権利などないのは自覚しているが……せめて、彼も了承していることなのかだけは確認しておきたかった。

「これらはすべてアーデインスから申し出のあったものだ。俺は許可をしたに過ぎない。もとより、おまえが気にすべきことではない」確かにその通りだ。わかっていて、口にした。

「わかりました」

「最後に、職についてだが。アーデインスはおまえに、自分が面倒を見ると約束していたそうだな」

「はい」

「だが、現時点でそれは許可できない。おまえに職を紹介するのは、心理学の有用性を試してからでも遅くない。くどいようだが、心理学というものがどんなものなのか興味がある。ただし、今度は個人としてではなく、国王としての興味だ」

あれ？　と思わず声が出そうになった。何だろう、これは。ついさっきにも同じような展開を経験したような気がするのだが。

「時間は好きなだけ与えよう。どんな形でもいい、おまえの学んだ心理学というものを見せてみる。当面の生活保障を返済義務のないものとするのは、そのためだ」

淡々と述べる国王の言葉を、私は呆然として聞くしかなかった。

人生初のクライエント 3

「面倒くさい」

この国の国王である、ローラント・フィール・ウィルナ・ユグドラス。その人と初めて言葉を交わした、その翌日。

いつものように二人での昼食となったその日、顔を合わせたその瞬間に、アーディンスさんはそう言って小さく溜息を吐いた。

開口一番に面倒だと言われた私は、事実その通り、今後とも保護者としてアーディンスさんのご厄介になる身であるわけだから、返す言葉もない。居心地悪く立ちつくしていると、それに気づいたアーディンスさんが片手で額を抑えながらも、座りなさい、と自分の座る正面の椅子――すっかり昼食時の私の指定席となってしまうたその場所に視線をやった。

素直に従って静かに席に着くと、いつものようにアーディンスさん付きの侍女がテーブルに食事を運んでくれる。湯気たつスープの香りは空腹の胃を心地よく刺激してくれるが、保護者であるアーディンスさんが手をつけない以上、保護されている身の上の私はただ見ているより他ない。

「……あなたは本当に、面倒くさい人だ」

再び溜息を吐いたアーディンスさんが、呆れたように言って、スープを手にしてスープを掬った。それを一口味わって、やれやれ、と言わんばかりに疲労を滲ませた碧の瞳で私を見る。

アーディンスさんには、私の考えていることなどお見通しらしい。この上気を遣わせてしまったことに申し訳ない思いを抱えながらも、それをどう上手く伝えていいのかわからず、「いただきます」とだけ告げてスープを口に運んだ。色は南瓜に近いが、南瓜よりも甘みの強い野菜を裏ごしして作ったらしいそのスープは、舌の上でふわ

りと溶けて優しく広がる。甘みが強い割にはそれがしつこくなく、とても美味しい。

「その様子を見ると、昨夜、今朝と、ろくに食べてはいなかったようですね」

続けてスープを口に運んでいた私に、アーデインスさんが言う。

その口調は、驚いているわけでも心配しているわけでもない。予想のついていたことを事実として目の当たりにして、とりあえず念押しで確認してみたといったところだろうか。

「食べる量は、いつもと同じだったんですが……」

せっかく作ってくれているものを残すわけにもいかない。出された分は食べたけれど、それだけだった。国王陛下と会った時のことが頭を占めていて、美味しいとか満腹だとか、そんなことを感じる気分にはなれなかった。

「味わう心理的余裕がなかったのでしょう。それでは、食べたところで満足感など得られるはずもない」

そういうことをアーデインスさんが口にするというのがどうにも意外で、私は思わず食事の手を止めてまじまじとアーデインスさんを見た。

そんな私に、対するアーデインスさんは心外そうに眉を顰める。

「何を考えているのかはわかりませんが、何か失礼なことを考えているというのだけは察しがつきます」

「……すみません」

何となく、私のイメージでは、アーデインスさんという人は食事さえも生きるために必要な作業の一環、という感じで捉えているものだと思っていたのだ。食事を味わう、楽しむ、などという言葉とは縁遠い存在だと。改めて考えれば、怒られて当然の物凄い偏見だ。

アーデインスさんも人間だったんですね、などという素直な感想は無論口に出せるわけもなく、私は後ろめたい思いを極力表情に出さないよう苦心した。

「まあ、あなたが私をどう思っているかとあなたの勝手ではありませんが、」

危うくスプーンを落としそうになった。

「一応、私も人間的感覚は持ち合わせています、と宣言しておきましようか」

ボチャン、と間抜けな音を立てて、今度こそスプーンをスプー皿の中に落としてしまった。スプーンを取り落としたままの姿勢で硬直する私の横で、冷静で有能なアーデインスさん付きの侍女がスプーンの沈んだスープを新しいものと交換してくれる。有難いけれど、スプーン入りのスープが飲めないような上品な環境では育っていない私には、とてももったいないことに思える。いや、全ては私が悪いのだから、何も言う資格などないのだが。

複雑な私の心中を尻目に、アーデインスさんは何事もなかったかのように優雅に食事をしている。以前からわかつていたことだが、この人は本当にいい性格の持ち主だ。

とりあえず、これ以上の失態を犯すわけにもいかない。私は大人しく食事をするだけに腐心した。

しばらく、会話のないまま時間が過ぎた。やがて、二人が昼食を食べ終えて、空になった食器を片づけた侍女が食後の紅茶を運んできてくれたところで、そのタイミングを待っていたかのように、アーデインスさんが口を開いた。

「陛下に気に入られましたね」

気に入られた。そうなのだろうか。心理学という、彼にとっては未知の学問に関して、少なくとも試してみる価値はある、と認められたのは確かだろう。まったくもって歓迎できない事態になってしまったものだ。

「あの方は、あなたという人間を試した。その結果として、あなたの何かがあの方の関心を惹いたのでしょう。そうでなければ、有用性も確かでない学問をお膳立てしてまでわざわざ試してみようなどと酔狂な真似をするはずがない。少なくとも、国王としてのあの方

はそういう人です」

「特別なことは何もしていないんですが……」

「何があの方の不可解極まりない琴線に触れたのか、今さらそれを考えてもしょうがありません。それよりも、あなたがいま考えるべきは、今後のことでしょう」

確かに、アーデインスさんの言うことはもつともだろう。考えたところで、何が好転するのかは、まったくもってわからないが。

「あなたに会ってもらいたい人物がいます」

唐突に、アーデインスさんはそう言った。

「会ってもらいたい、と言いましたが、あなたに拒否権はありません。これは、陛下のご意向ですから。……この意味がわかりますか？」

陛下の意向と言われれば、わからないはずがない。どんな形でもいい、おまえの学んだ心理学というものを見せてみる、とあの人は言った。つまりは、そういうことなのだろう。

「昨日の今日で、ですか」

「不明瞭なことは、多少強引でも白黒はっきりさせなければ気が済まない。そういう方なのです」

ならば、多少適当にでも心理学とはこういうものです、と言ってしまえばよかっただろうか。まあ、その時は知らなかったのだからそれは仕方ない。

「私がお会いすることになるのは、こういった方なのか……というのは聞いてもいいんでしょうか？」

「構いませんよ。とは言っても、ほとんど会話もしたことのない人ですから、私の知っていることなどほんの僅かですが」

そう前置くと、アーデインスさんは紅茶を一口啜って、再び口を開いた。

「これからあなたに会ってもらう人物は、名をオスヴァルト・セレヌ・ウィルナ・ユグドラス。ユグドラスという名が示す通り、王族の一人で、陛下の双子の弟に当たります」

「王弟殿下、ということですか」

「本来であればそうでしょう。ですが、この国で彼をそう呼ぶものは皆無と言っている」

「それは、陛下と双子であることに関係していますか？」

「やっぱり、王位継承者が双子というのはいろいろ微妙な問題があったのではないだろうか。昔、そういう映画を見たことがあるような。」

「広義としては正解、狭義としては不正解、というところでしょうか」

少し考えた様子で、アーデインスさんは言った。

「ですがそれは、私の認識においての話です。実際に接していくうち、あなたにはあなたなりの答えが見えてくることでしょう。余計な先入観を与えないためにも、今は事実だけを伝えることにします」
「感覚的にはなんとなく納得できるが、正確な意味は正直よくわからない。」

「この国において、彼を示す呼び名は二つです。セレヌ一等兵、もしくは、出来損ない」

「一国の王族が、一等兵で、出来損ない……ですか」

軍の階級などよくわからないが、映画や本などで登場する一等兵は、ちよつと優秀な若手くらいの人が持っている階級だったような気がする。そのうえ、出来損ないとは、あまりに酷い扱いじゃなからうか。

「この国の成り立ちや自然環境については、以前にお話しましたね。我が国が座すこの土地は、厳寒の北方。ましてや、いつ何時、肅清の名のもとに他国に侵攻されるとわからない危機感に常にさらされ続けてきた」

「はい」

「そんな国において、もっとも忌避される存在とは何だと思えますか」

「……足手纏い。役に立たない、存在」

「その通り。我が国では、そうした者は弱者と呼ばれます。この国に生きる全ての者にとって、弱者であることは最大の罪悪だ。そこに王族であること、血の尊さなど関係ない」

王族さえもが秤にかけられる、そういう国だと。ある意味平等で、このうえなく不自由な国だと思う。そもそも、強い者と弱い者の定義なんて酷く曖昧なものだろうに。

「ひとつ、教えておきましょう」

そう言うと、アーデインスさんは静かに席を立った。ゆっくりとした足どりでテーブルを迂回し椅子に座す私のすぐ隣に来ると、彼は自身の左足に視線を落とす。

「この足は、歩く分には何ら問題ありませんが、走ることは叶わない。生まれつき、そういう足です。私は、剣を手に取りこの国を守ることは出来ない人間だ。……ですが、私を弱者と呼ぶ者はいません」

きっぱりと言い放ったその声は、揺らぐことなく強い響きでもって周囲の空気を震わせた。根拠のない自慢話をするような人ではない。彼が口にするからには、事実そうであるのだろう。きっとこの人は、自信を持ってそう言えるだけの努力と実績を重ねてきたのだ。だから、言える。

「それはつまり、肉体的な強さだけがこの国においての強さではない、と？」

アーデインスさんの言葉に比べれば、消え入りそうなほどに弱々しい私の疑問に、彼は首肯した。

「我が国における弱者強者の定義とは、わかりやすく言えば先ほどあなたが言った言葉そのままです。この国にとって、いかに役立つ存在であるか。いかに、役立たない存在であるのか。理解しがたいかもしれませんが……この国に生きる者は、誰一人としてこの定義から逃れることはできません」

そしてそれは、あなた自身も例外ではない。言外に、そう言われた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1382u/>

ある異世界召還物語の、草稿

2011年10月7日03時21分発行